

シヤンの行方

高 谷 紀 夫*

Who Are the Shan?: An Ethnological Perspective

TAKATANI Michio*

This paper is an attempt to present a perspective for ethnological analysis of Shan people living in Burma. "Shan" was originally used to refer to Tai-speaking people by the Burmese. The Shan have been politically and culturally influenced by the Burmese through historical contacts between them, and I will refer to this process as "Burmanization." In parallel with this phenomenon, the Shan must have experienced a kind of "Shanization" that seems to have raised their own ethnic self-consciousness.

When we study about the inter-ethnic relationship between the Shan and the Burmese, "Ko Shan Pyi" (Nine Shan States) emerges as one of the keyterms, for both sides have records of nine legendary chiefdoms or *mong* of the Shan. According to some records, Mogaung (Mong Kawng) was the leader among the chiefdoms, having been founded by a legendary hero who came from Mong Mao. Mong Mao is thought to be the earliest site of the Shan in Burma. But Mogaung is now located not in Shan State but in Kachin State and is merely an imagined centre of the Shan.

The Shan who migrated to Kachin State have been more Burmanized than those in Shan State. Therefore, the latter seem to have preserved their own culture. They must have adjusted to the environmental conditions of the Shan plateau, through which the Irrawaddy and Salween Rivers pass. This area, historically called "Kambawza," may have been the cradle of Shanization.

序

現ミャンマーのカチン州にモーガウンという町がある。シヤンの人々が、彼らの歴史を語る時、この町の名前がつねに登場する。特にかつての伝統的な首長であるソーボワの時代を語る場合にである。行政的にシヤン州という民族名がついた地域が別にあるのに、シヤンの人々はなぜモーガウンの名を挙げるのだろうか。

本論は「シヤンとは誰？」という民族学的に基本的な課題について、ある妥当な考察の見通しを得ることを目的とする。その主資料で、今後の研究の出発点として提示したいのは、シヤンの人々自身の語る「シヤンとは誰？」であり、歴史的に彼らと交渉を保ってきたビルマ人側の記録である。時代的には、19世紀後半の王朝時代末期から現代までを視野におさめる。つま

* 広島大学総合科学部； Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University, 1-7-1 Kagamiyama, Higashi-hiroshima 739-8521, Japan

りさまざまな立場からの語りの位相とその背景が本論のテーマである。シャン系諸民族の文化と社会については、未調査の部分がほとんどである。なぜなら1962年以降、政府が事実上の鎖国政策をとったために、シャン州、カチン州など地方への外国人の旅行が制限されてきたからである。現在に至るまで、まとまった参考資料といえるのは、英領時代にまとめられたもののみである。1990年代に入って地方への通行が少しずつ認められるようになってきた。本格的な調査研究はこれからである。

本論が扱うフィールドをビルマ世界と呼ぶことにする。世界という曖昧な表現を用いるのは、現時点での収集データを基礎としつつも、その内容は通時的なある立場からの世界解釈を含むものであり、その歴史の過程において支配的な役割を果たしてきたのがビルマ人であったから

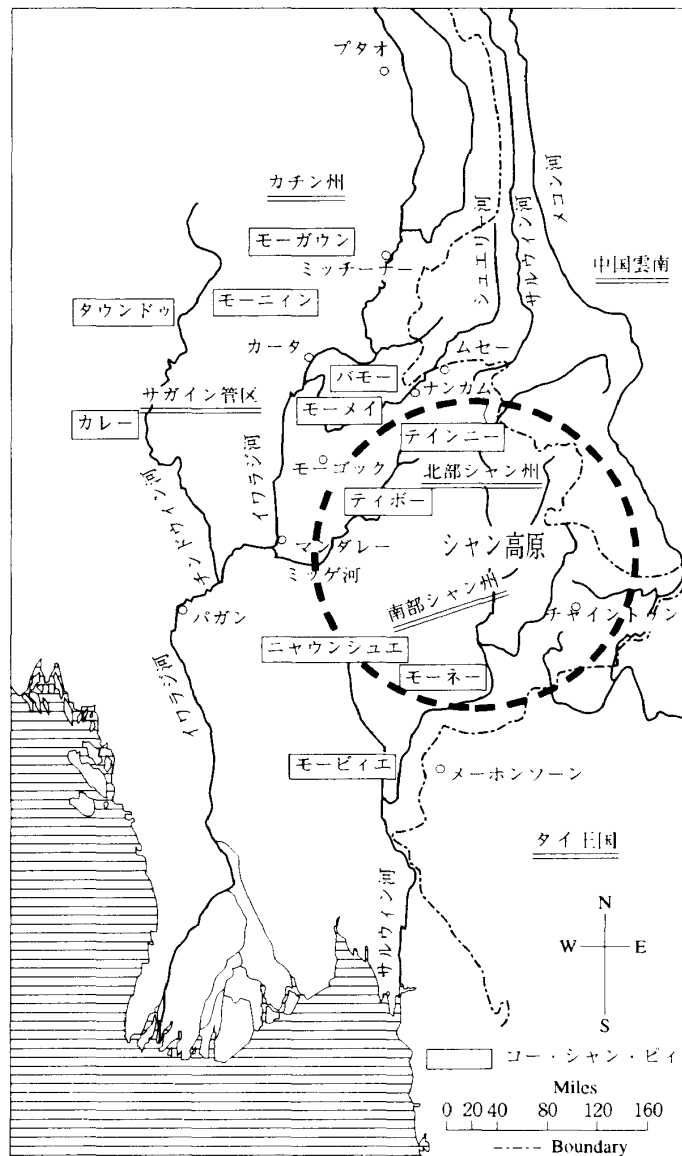


図1 シャン高原とコー・シャン・ピイ

である。カチン州で会ったあるシャンはこう語った。「自分たちはビルマ人のような『くに』がない民なのだ」と。ビルマ語でシャン・パイと表現される「シャンのくに」は、本論が扱う時代において独立した政治単位ではなかった。とするならば、現在伝聞できるシャン自身によるシャンのくにについての語りは、過去の記憶、あるいは周辺の人々との交渉の中で形成してきたある世界観からのイメージの産物ということになる。本論では、歴史と伝承の間を往復しながら、ビルマ世界におけるシャンの行方をたどろうと考えている。その理由から「ミャンマー」は1988年以降の現国家をさすこととし、「ビルマ」と使い分ける。

シャンとはビルマ世界で伝統的に使われてきたタイ語系の言語を話す人々に対する呼称である。つまり他称が起源である。但しシャン(Shan)と綴る名前は、英領植民地時代にタイ語系の言語を話す人々に対して、広く欧州人によって適用されていた。結果的に彼らがシャンという用語を外の世界に広めたと思われる[高谷 1996:4-5]。彼ら自身は自称は「タイ(Tai)」だと語る。タイという自称の説明がいつ頃からなされるようになったか詳らかではないが、「シャン」についての上述の起源と用法の説明は現時点において妥当だと思う。しかしシャンという呼称の初出は、ビルマでは12世紀の碑文にシャム(Syam)として見え[エー・チャン 1987:29-30]、その使用年月は決して短くない。隣のタイ王国は、1939年までシャム(Siam)が国名であった。これらのことばは語源的に関係が深い。シャンの名称を自称であるタイに代えようという動きは、ビルマでは全く聞かれない。ビルマ人が最大民族を占めるビルマ世界において、シャンの人々は、ビルマ語とシャン語の両方を操るあるいは操ることを必要とされてきたのである。ビルマ人が全くといっていい程シャン語ができないのと比較すれば、その差は歴然とする。シャンはビルマ世界において、他称であるだけではなく、ビルマに対する自称としての性格もそなえているあるいはそなえてきたといえるかもしれない。

本論では、このようにシャンがビルマ世界あるいはその政治統合に取り込まれていく過程を、概略的に「ビルマ化」と呼ぶことにしたい。また仮説的に「シャン化」という過程にも着目したい。後者は、ビルマ世界におけるシャンの人々とその歴史についての伝承と言説に見られる民族意識の表出を念頭においており、ビルマ化はシャン化の背景のひとつでもある。後述のように、シャンの人々の民族意識の視野には、周辺民族も取り込まれており、「シャン化」には、これからの検討の余地が残されていることを認識した上で、本論においては、ビルマ世界におけるシャンという視座から、シャンのビルマ化をひとつの軸に、シャンのシャン化をもうひとつの軸として展開する。

カチン州のモーガウンという地名はシャン語源である。Mong Kawng と綴る。ビルマ人は Mogaung とする。つまりモー(Mo)はタイ語系の人々に共通する生活単位であるムオンと同一である。その視点にたつてビルマ語版のカチン州及びシャン州の地図を眺めると興味深いことに気づく。第一に Mo と綴られる地名と、ムオンつまり Mong に音が近い Maing という綴りで

表される地名とが二通りあること。第二に、Moと綴られる地名はカチン州及びシャン州の西側に限定されること。そしておそらくもっとも重要な点は、事実上モーガウン、モーニン、モーゴックなどのモーで始まる地名は、王朝時代よりビルマ宮廷と関係の深かった場所であることである。モーガウンとモーニンは、ビルマ王と交渉のあったシャンの首長（ソーボワ）が治めた場所である。モーゴックは、現在はマングレー管区に位置する有名な宝石の生産地である。シャンの人々は、モーゴックを元来シャンの領域だと語る。この地は王朝時代より、ビルマ王の直接支配を受けてきた。その経緯は植民地時代を経てそのまま現在の行政区分の根拠となっている。これらの地名は、いずれも明らかにビルマ語化が進んでおり、政治的力関係からして、王朝時代以降ビルマ化の進行したことが十分予想される場所なのである。

後述するように、現在シャンの人々が、かつての自分たちの支配領域を語る際に必ず言及するのは、9つのムオン(Mong)あるいはムオン・タイ(Mong Tai)である。それぞれにかなりの数の町や小規模のムオンが含まれている。ビルマ側の記録では「モー・コー・ピータウン」「コー・シャン・ピ」という表現になる。そのまま翻訳すると、「モー(シャン)の9つのくに」「9つのシャンのくに」という意味になる。その中には上述のモーガウン、モーニンなども含まれる。その他のMong語源の地名もいずれもMaingではなくMoと綴られる。シャンの人々が自ら語る「歴史」に、この9つのくにの名前が記載されていることは、記憶しておく必要がある。歴史的事実であろうとなかろうと、シャン化の脈絡での「歴史」叙述としてである。近代的国家体制と区別するために、伝説に係わるピイあるいはピータウンをここでは「くに」と呼ぶことにする。

リーチの記述再考

シャンと呼ばれる人々の生活領域は、現在主としてシャン州及びカチン州にわたる。この2つの行政区画をにらんだ場合、避けて通れない文献がリーチの『高地ビルマの政治体系』である。この著作はいうまでもなく既存の「民族」研究に警鐘を鳴らしたものであるが、彼のフィールドはカチン州とシャン州の境界であり、さらに中国国境とも近いという場所に位置している。リーチの記述は、そのフィールドの地域的特殊性に影響されていないであろうか。影響されているとするとどの部分なのだろうか。リーチの著作についてはフィールドの文化地理的な位置もさることながら、第二次世界大戦下という時代的背景も考慮に入れる必要がある。現在、我々が訪ねることができる彼のフィールド（フィールドそのものは未開放）周辺は、リーチの時代とは別の政治的社会的環境におかれている。しかしながら地域性ということに鑑みて次の点で再検討しておきたい。それは彼が紹介するビルマ人によるシャンの分類である。

彼は、シャンはシャン・バマー(Shan B'mah)、シャン・タヨック(Shan Tayok)、カムティ・シャ

ン(Khamti Shan)という3つのグループに区分されると紹介している。最初のビルマ系シャンと呼ぶべき人々は、ビルマ系シャン諸首長国のサオパ(saopha)と呼ばれる土侯に治められ、ビルマ王に名目的に従属してきた人々を指す。二番目の中国系シャンは雲南側のシャン諸首長国の人々に該当する。タヨツ(Tayok)は、ビルマ語で中国を表現することばである。また雲南側から移住してきたシャンもそう呼ばれる。最後のカムティ・シャンは、ビルマ系シャンの亜系であり、かつてモーガウンに忠誠を保ってきたシャンであるとリーチは解説している [Leach 1954:32-34]。

リーチの記述に従えば、シャン・バマーとは、その程度はともかくビルマ化の影響を受けてきた人々となる。該当する領域はリーチのフィールドのみならず、現シャン州も広く含まれる。ところが、シャンの分類に関して、シャン州においてシャン・バマーという言い方は全く伝聞できない。現在も聞かれるのはカチン州でのみである。実はリーチ自身、脚注で、この表現はミッチーナ、バモー地域でのみ通用すると述べている [ibid. :32]。つまりカチン州での用例ということになる。その点でリーチの時代と現在は共通する。ビルマ人はシャン州のシャンをそのままシャン(Shan)と呼ぶ。もしシャン・バマーと呼ぶことがあるとするならば、ビルマとシャンを両親にもつ子供に対する一般的「民族」認識においてである。

一方、現カチン州には、ビルマとシャンを両親にもつ場合の他に、ビルマ語でシャン・バマーあるいはシャン・ニー(Shan-Ni)と呼ばれる人々が居住している。モーガウン、モーニン周辺に特に多いといわれている。シャン語でタイ・リエン(Tai-Lien)と自らを呼ぶ。彼らはビルマ化の影響を認めながらも、同時にシャン系であるという出自を誇る人々である。彼らの語る伝説の中では、モーガウン・ソーボワは祖先とされている。

シャン・タヨツという表現には明らかに中国とビルマ世界との政治的文化的境界が反映されている。その自称は、上流のシャンを意味するタイ・ヌー(Tai-Nu)である。ビルマ語では、タイ・ヌーではなくタイ・レー(Tai-Lai)と表す。ヌーとレーは、言語学的に近い音である。カムティ・シャンはタイ・カムティ(Tai-Hkamti)が自称である。

ビルマ世界において、シャン・タヨツはその政治的文化的出自に引き付けられて理解され、カムティ・シャンは、現在カチン州プタオ周辺、チンドウイン河上流に主に居住するまとまりのある民族集団であるとみなされている。他方、リーチのいうシャン・バマーについては、その空間的広汎性からして、また時代は経るが現在の用例からしても、そう呼ばれた人々に文化的共通性はあるものの、少なくとも、他の2分類のような民族としてのまとまりは認められず、リーチの3分類のそれぞれはその意味する対象が質的に異なっている。シャン・バマーという表現自体が二次的なものだという印象があり、ビルマ化されたシャンという名付けの主体は、あくまで他民族なのである。シャン人自身は用いない。植民地時代を知るバモー出身のあるカチンの古老は、シャン・バマーが自称タイ・リエンという民族と同じであると認める一方で、

彼らはビルマ語が主たる言語となって、時にはシャン語も忘れ「シャン・バマーになったのだ」と説明する。またその起源は11世紀のパガン朝アノーヤター王の中国遠征に溯り、そのまま残留してシャンと混血した人々の子孫であるとか、英領時代のカチン州の鉄道敷設労働者のビルマ人の子孫だとも語る。バモー付近では、シャン・ニーの他にタイ・シャウン(Tai-Shaun)がシャン・バマーだという呼称も聞かれる。「河の側のタイ」という意味で特定の集団を必ずしも対象としていない。このようにシャン・バマーは、特定の民族の名前というよりも、ビルマ化を差異化の契機とした民族間関係におけるビルマ語のある種の社会的指標としての性格が強いのである。

タイ・リエンと現在自称する人々がいつ頃からシャン・バマーと呼ばれるようになったか、上述のカチン人古老の語りが歴史的事実かどうか、そしていつ頃からどのような経緯で具体的にビルマ化を受けてきたかは詳らかではない。しかしそのタイ・リエンの文化的特徴の形成においては、ビルマ化の過程がひとつの重要な要素となっていることは重ねて確認しておきたい。シャン・バマーという呼称をめぐる民族間関係の位相は、シャン州のシャン、カチン州のシャン・バマーあるいはシャン・ニー、それぞれのシャン系統の人々が歩んできた歴史を背負っているように思われるのである。シャン・バマーについては後でもう一度扱う。

ところでリーチは伝統的首長をサオパと呼んでいる。ビルマ語のソーボワ(Sawbwa)の起源となることばだが、ソーボワとなると、ビルマ王に従属を認知されたいわば称号のような意味をもつ。ソーボワとは、シャンのサオパがビルマ王との交渉の中でビルマ化された記号のひとつと考えた方が妥当と思われる。上ビルマが植民地化された時に、ソーボワの領地はそのまま英国がソーボワ制を温存する形で引き継いだ。ソーボワの認知の主体は、ビルマ王から英国に移行したのである。

国家による「民族」政策、「民族」分類

ビルマのセンサスは英領植民地時代から実施されてきた。その最後の本格的な国勢調査は1983年4月に行われ、80年代後半にその報告書が刊行されてきた。10年後の1993年には実施されていない。ミャンマー政府は、83年のセンサスを基礎に、自国は135民族で構成されると発表し、その後も「民族」政策に係わる脈絡でこの数字を繰り返している。この国は1948年の独立以来、民族の団結を連邦国家の国是としてきた。1988年9月以来政権の座にある国家法秩序回復評議会(SLORC、通称ナ・ワ・タ、1997年11月に国家平和発展評議会(SPDC)に改名)は、少数民族勢力との和平交渉を進め、それと平行して国境地域の開発の目的で辺境地帯民族集団進歩発展省を設置、また国民の底辺からの民族団結精神の具体化のために、1993年には連邦団結発展協会(USDA)を結成し、現在も会員の増大を図っている。政府高官やこれら関係組織の

演説などにおいても、全民族数が言及される場合は135である。

しかしそのリストを見ると、不可思議な部分が散見される。独立以降のこの国の民族研究を率いてきたのは文化省である。その文化省が革命評議会時代（1962-1974）に編集した民族文化に関係するある出版物には「自国の民族の数は60余りである」[Min Naing 1971:13]と明記されている。ちなみに現時点においても「民族」研究に関する重要文献は、60年代後半から70年代に出版された当時のビルマ社会主義計画党編集による民族名を冠称した7つの州毎の報告書である。ナ・ワ・タ政権下ではそのような出版物は見当たらない。革命評議会時代からビルマ社会主義計画党(BSLP)時代（通称マ・サ・ラ期、1974-1988）にかけては、「民族」と直接対峙する時代であったといえるかもしれない。民族の団結という国家のスローガンは不変でも、研究成果に現れる「民族」政策の政治的脈絡は変化していると思われる。

従って135の民族についても、ミャンマー政府の「民族」政策の一局面として理解することが肝要であろう。その135民族はカチン、カヤー、カイン、チン、バマー、モン、ヤカイン及びシャンに分類されている。ほぼ行政区分に沿った分類である。シャン群の33民族には、シャン(Shan)、シャン・ジー(Shan-Gyi)、タイ・ロウン(Tai-Long)の3民族が含まれている。このシャン群には、言語学的には非タイ系の民族も含まれている（下記参照）。

シャン(Shan), ユンあるいはラオ(Yun/Lao), クワイ(Kwi), ピイン(Phyin), タオ(Thao), サノー(Sanaw), パレー(Palei), イン(In), ソウンあるいはサン(Soun/Hsan), カム(Hkamau), コーあるいはアカ／イコー(Kaw/Ahka/Ikaw), コーカン(Kokang), カムティ・シャン(Hkamti-Shan), ゴウンあるいはクン(Gon/Hkun), タウンヨー(Taunyo), ダヌ(Danu), パラウン(Palaung), ミャウンジー(Myauzi), インチャー(Yinkyä), インネツ(Yinnek), シャン・カレー(Shan-Kalei), シャン・ジー(Shan-Gyi), ラフ(Lahu), ルエラ(Lwela), インダー(Intha), アイトウエ(Aiktwe), パオ(Pao-Taunthu), タイ・ルエ(Tai-Lwe), タイ・リエン(Tai-Lien), タイ・ロウン(Tai-Long), タイ・レー(Tai-Lai), マインダー(Maing-tha), モー(マオ)・シャン(Mao-Shan)（アンダーラインは本論で言及する民族）

実は、シャン・ジー（意味は大きなシャン）の自称がタイ・ロウンだと彼ら自身また周辺民族の誰もが説明する。シャン・カレー（意味は小さなシャン）はそれと相対的な表現である。135民族の確定の経緯についての詳細は不明であるが、民族学者ウー・ミンナインからの伝聞によると、被調査者の自己申請の民族名をそのまま集成したので重複があるのではないかと、それにシャン州を行政区分とした政治的な意味を加えてシャンも別個に含まれているのではないかと。いわば、シャンは民族名であると同時に、シャン州に居住する人々の総称カテゴリーという意味も付与されているようである。但し全てそうとはいえない部分もある。リーチの紹介す

るシャンの分類に含まれるカムテイ・シャンは、その主勢力がカチン州プタオ周辺に居住しているが、シャン群の中に含まれている。タイ・リエンもその中心はカチン州である。このように行政区画に基礎をおきつつも、民族系統に若干配慮した折衷的な分類のようにも思える。このように政府による「民族」分類には必ずしも一貫性が認められない。まさに135は総数として、しかも政治的にのみ意味を担うのである。

現在、多様なはずの「民族」文化の個別的特徴は、その生活する現場からではなく、政治的な脈絡で再構成された形で提示されている。それぞれの州には、民族文化団体が組織され、彼らは来訪する政府高官の接待や首都ヤンゴンでの政府主催の各種イベントに動員されている。国営テレビでもスタジオでしかも限られた時間で紹介される。さらに複数の民族文化団体が同じ振り付けで登場する場合もある。そこで現出する衣装や歌舞音楽は、その文化的脈絡を逸脱し、政府主導で構成された見せるためのものに変化している。「民族」文化の一部にだけスポットがあたる。もはや「民族」が生活文化の全体像として注目される時代ではもうないかのようである。逆にそれぞれの民族の自民族意識が、個別文化の伝承にあたってこれから問われるかもしれない。

「民族」の法律的根拠

上記で呼んだ「民族」はいずれもビルマ語ではルーミョウあるいはタインインダー・ルーミョウと表現される。この用語を含めた政府関係での用例を確認しておきたい。

多民族国家においては「国民」「市民権」「民族」に係わる用語が問題となる。ビルマの場合、その用語は「アミョウダー」「ナインガンダー」そして「タインインダー」の3つである。国立博物館などの場合はアミョウダーが使われることから、国民一般を指す場合に用いられていると考えられる。法律的に重要なのは、後の2つである。現行の法律では次のように規定されている。

本国家の領土内に、ビルマ暦1185年西洋暦1824年以前より故地として恒常的に居住していたカチン、カヤー、カイン、チン、バマー、モン、ヤカイン、シャンを始めとする諸タインインダー及び同系統の人々は、ナインガンダーである。

どの系統がタインインダーかそうではないかは、国家評議会が決定できる。

ナインガンダー法3条、4条 1982年公布 [Chit Maung 1987]

タインインダーの基本的な意味は、原住民である。引用した法律は、独立時の1948年の前法を廃止して、マ・サ・ラ政権の時代に制定された国籍及び市民権に係わるものだが、国家評議会

が廃止された後も、そのままミャンマーの国家法秩序回復評議会政権に引き継がれている。3条に挙げられているタインインダーの代表の8つは、1974年の憲法で確定した7つの州の名前にバマーを加えたものである。先述の135の民族の下位区分の枠と全く重なる。ビルマ暦1185年というのは、第一次英緬戦争をさす。この戦争を契機に英国によるビルマ植民地化が領土割譲という形で本格化し、外国人が多数流入してきたという歴史的事実を根拠としている。

ナインガンダーは法律上の資格という点では「国民」という意味に近く、他のナインガンダーという意味のナインガンジャーダーと対比される。後者は一般的にも法律的にも外国人を指す。現在この国の人々は世帯毎の認定台帳と国民認定カードを保持している。後者はナインガンダー・シーシツィエー・カッピャーという。このカードには、信教と並んで民族(ルーミョウ)を記載する欄が設けられている。交付は1989年8月以降のナ・ワ・タ政権下である。

上記はあくまで法律上の規定である。しかもその認可の裁量を政府が握っていることは見逃せない。歴史的に考えて、タインインダーに関してカチンに始まる8民族を代表とできるのは、あくまで1974年以降の政治的脈絡においてである。また民族学的に考えた場合にも、さまざまな疑問が生じる。たとえば山岳部に住む少数民族には、移動生活を営む人々も数多く含まれ、第一次英緬戦争以前に領土内に定住していたことを証明することは容易ではない。自主的であれ強制的にであれ、移住してきた中国系住民、インド系住民の処遇も問題となる。現政権は、シャン群タインインダーのひとつであるコーカンに対しては「民族」として認知している。だがパンテー(Panthei)の認知申請に関しては受け入れていない。いずれも中国語を母語とする人々で、前者は仏教徒、後者はムスリムである。その対応の違いには、政治的意図が感じられる。コーカンは現政権と1989年に和平協定を結んだかつての抗争の相手なのである。

インド系のモスリムの人々に、その国民認定カードのルーミョウ欄にミャンマーと記されているのを見せてもらったことがある。彼らは第一次英緬戦争後に英領インドから連れてこられた人々の子孫であり、出自もはっきりせず、国民認定にあたっては容易でなかったと述懐する。

上述の「民族」の規定は、ある意味でビルマ側からのシャンの「シャン化」のひとつの様相といえるかもしれない。このように、現行のタインインダーの認定の裏面史については、独立前後から現在に至るビルマ人と非ビルマ人との民族間関係が深く係わっている。

コー・シャン・ピイ(Ko Shan Pyi)

コー・シャン・ピイあるいはシャン・コー・ピイタウン、いずれもそのかぎとなる数は9である。現マンダレー大学歴史学教授ウー・トーフラは、そのエッセイで次のように述べている。「チャイン9チャイン、ムオン(マイン)9ムオン、ダー9ダーと9ソーボワが治めてきたのがカンボーザの国シャン・ピイといわれる」[Toe Hla 1982:13]。チャインとは町、ダーは刀

を意味する。ムオンとソーボワについては、すでに説明した通りである。カンボーザ (Kambawza) は、シャンの土地を表現する際に、しばしば用いられることばで、特にサルウィン河の西側を指すと考えられている。その地域を治めるソーボワの正式称号の一部にもなっていた。このような9を重ねる言い回しは、ビルマ語によるシャンに関する文献でしばしば見ることができる。

ビルマにおいて歴史叙述の重要文献とされるのが王朝年代記である。そのひとつが19世紀のコンバウン時代後半から編集された『フマンナン・マハー・ヤーザウイン・ドージー (玻璃大王朝年代記)』である。その139章には「モー・コー・ピタウン」を治めるソーボワの娘であるソーモンフラと、バガンのアノーヤター王との出会いと別れが描写されている [HMYD 1993: 254-256]。ここでいわれるモーとはモー・シャン (Mao-Shan) であり、ビルマ世界へのシャンの登場の先鞭は、このモー・シャンだと内外の歴史研究者は考えている。モーは、一般的にはイラワジ河の支流シュエリーのシャン語だと解釈され、彼らの登場の場所は、現在のムセー、ナンカム周辺だといわれている。

上述の王朝年代記の箇所には9つのくにの具体的な名前は見当たらない。シャン州、カチン州での伝聞及びビルマ語及びシャン語の文献のヴァージョンを紹介しよう。

《ヴァージョン1》モーガウン、モーニン、モーメイ、モーネー、バモー、テインニー、ニャウンシュエ、ティボー、モービエ [Mi Mi Lwin 1992:1]

《ヴァージョン2》テインニー、ティボー、モーネー、ニャウンシュエ、モーメイ、モーガウン、バモー、モーニン、カレー

《ヴァージョン3》モーガウン、モーニン、モーメイ、カレー、テインニー、ティボー、ニャウンシュエ、モービエ、モーネー

《ヴァージョン4》モーガウン、モーニン、タウンドウ、モーメイ、テインニー、ティボー、モーネー、ニャウンシュエ、モービエ [Hko Hseng 1996:250]

《ヴァージョン5》モーガウン、モーメイ、モーニン、カレー、ティボー、テインニー、ニャウンシュエ、モーネー、モービエ [Sao Keng Tung 1954:9]
(最後の2つはシャン人によるシャン語の文献から)

現在の行政区分からその地理的位置をたどると、モーメイ、テインニー、ティボーが北部シャン州に、モーネー、ニャウンシュエ、モービエが南部シャン州に、モーガウン、モーニンそしてバモーがカチン州に、カレー、タウンドウがサガイン管区のチンドウィン河沿岸に分けられる。また多くのヴァージョンにおいてモーガウンが冒頭に挙げられているが、シャン人の歴史研究者によると、モーガウンはコー・ピタウンの中の最有力で、その建国には複数の伝

説があるが、その中でもっとも知られているのは、シュエリー河沿いに展開したと伝承されるムオン・マオ（モー）王国と系譜的につながっている筋書きである [Pu Loi Hom and Pu Loi Tun 1997]。モーガウンは、現在のシャンの伝承の中では、かつての栄光の王国の中心として意識されている。いわばイメージ化されたくにがそこに表現されている。「シャンの土地には99のムオンがある」という言い方もあるが、シャンの語りではその数のムオンを治めるのはモーガウンなのである。19世紀後半の西洋人の文献にもモーガウンの有力性について言及されている [Elias 1876:39]。

歴史的事実としては、コンバウン時代の末には、モーガウン、モーニン、バモーの現カチン州の3つの町には、ソーボワも、位階の上ではその下になるミョウザーもおかれず [San Shwe 1992:4]、シャンの政治的力関係での主力は明らかに現シャン州に位置していたようである。この流れは英領化の後にも戻ることはなかった。カチン州はシャン州とは別の行政区画となったのである。首長たちは、シャン諸州(Shan States)のソーボワやミョウザーとして、英国行政府に認知されることになった。その中に含まれるかつての9つのくには、ティンニー、ティボー、モーネー、ニャウンシュエ、モービエ、モーメイの6つである [BG 1895:262]。モーガウン、モーニンの名前はない。

但し、当時、現在のカチン州にシャンの人口が少なかったわけでは決してない。1931年に実施された英領時代のセンサスの民族別統計によると、上述のコー・シャン・ピイが位置する行政区画では、シャンの人口は次の通りである。南部シャン州は、約41万人で同区域全体の47%、北部シャン州が約29万人で全体の47%、モーガウン、モーニンが含まれる現カチン州のミッチナー県が約6万人余りで全体の36.5%を占めそれぞれもっとも多い。カチン州バモー県が約3万人余りで全体の28.5%で39%のカチン人に続いている。現サガイン管区の上チンドウィン県には約9万人弱が住み、全体の42%を占めてビルマ系の48%に次いで、カータ県でも約6万人余りが全体の24%でビルマ系の53%に次いでもっとも多いと報告されている [CI 1931:243-244]。いずれの地域においても、シャンの勢力が決して弱くはなかった。1983年のセンサスでも、カチン州総人口約80万人の内、カチン人が約30万人、ビルマ人が約24万人、シャン人が約20万人 [KSPC 1987] で、シャン人は現在でも少なくない。従ってコー・シャン・ピイの中心モーガウン伝説を支えるシャン側の民族的基盤は、過去も現在も認められる。しかしながら伝承がビルマ側からシャン側へ導入された可能性も否定はできない。

先の資料のように、ビルマ側シャン側双方に「9つのくに」のヴァージョンが認められる。引用関係などを考慮しながらどちらが初出なのかを考えるには、まだ研究の蓄積が十分とはいえない。コー・シャン・ピイは、ビルマ側の転記ミスだという考え方もある。古代インドの伝説上の町であるコーサンビ(Kawsambi)が語源だという説からである [Scott and Hardiman 1900:189]。一方『タイ族の歴史』の著者であるチット・プーミサックは、コー・シャン・ピイ

について、「タイ族がビルマ語の『コーシャーンピー』を取り入れて、それを変えて『コーサームピー』にしたのではないかと思う」と述べている [チット・プーミサック 1992:129-130]。

またコー・シャン・ピイの伝承と平行するように、コー・ミョウ・シンと呼ばれる精霊の祠が、シャン州各地そして少数ではあるがカチン州にも存在する。コー・ミョウ・シンとは「9つの町の主」という意味のビルマ語である。一部のシャンの人々の間では、コー・ミョウ・シンとコー・シャン・ピイが、認識の上で重なったり、その統治者が同一視されている。ところが「9つの町の主」の信仰は、あくまでビルマの精霊信仰体系の中に位置付けられると考えられる [高谷 1995]、いわばビルマ化の一つの事例だと思われる。従って、コー・シャン・ピイに関するシャンの語りも、ビルマ化を背景にしたシャン化の産物であるという可能性も十分考えられるのである。

参考までに、シャンの歴史家であるウー・サインアウンタウンによると、タインインダーのひとつであるコーカンは、シャン語で9つの土地という意味で、彼らはかつてテインニー・ソーボワに従属していたと説明している。このように「9」に関するいくつかのことばが、シャンの分布地域の周辺に認められる。シャンの歴史及びその伝承と、9のシンボリズムの問題は、今後の興味深い課題のひとつなのである。

カチン州のシャン

ビルマ語でシッシツという言い方がある。「民族」名の後に付くと「純粋な」という意味になる。幾人かの人々をビルマ語でシャン・シッシツとして紹介された経験を筆者はもつ。そしてほとんどの場合、シャン州出身のシャン・ジーと自称する人々であった。系譜的には別の系統が含まれていてもである。カチン州バモーでは、シャン・バマーはシャン・カレーだという伝聞もあった。シャン・シッシツとはどんな民族のカテゴリーなのだろうか。どの出自の人々や集団が「純粋な」シャンのカテゴリーに含まれるのだろうか。シャン・シッシツはある立場からの「民族」解釈にすぎず、必ずしも系譜的に厳密である必要はないように思われる。むしろ民族意識と関係するシャン化の表現と考えた方が良さそうである。しかもある特定の民族にというよりも、シャン州という空間にシャン・シッシツという表現が依拠している点が注目されるのである。

現在のシャン州の民族分布については、統一された見解はまだ存在しない。革命評議会時代の文献には、1955年のセンサスに基づいて27の民族名が記載され、さらに土地によってはさらに細区分できる少数民族もいるとして32民族名が挙げられている。その前者には東部シャン州の中心地チャイントウン付近にリー(Li)と呼ばれる人々がいるとある [BSLP 1968:44-50]。リーは、中国雲南省西双版納の主力民族であるタイ・ルー(Tai-Lu)と同一と考えられている。

だが135民族には含まれていない。シャン州の文化省民族調査担当者も未調査未確定の余地を認めている。治安の確保が急務な状況ではそれもやむを得ないであろう。歴史的にはシャン州及びカチン州と中国との国境線は、ビルマ独立後、しばらくは、国民党の流入、中共党軍の侵入など国境確定が容易でない状況にあった。バモーなどの南部カチン州とシャン州の治安は現在に至るまで不安定である。サルウィン河東側の国境線沿いは未開放地区である。

だが民族学的未調査だけが理由ではなく、シャン系の人々による民族認知自体の複雑さもあるように思われる。長谷川清は、タイ（シャン）系諸民族には、自己の出身ムオンを参照枠とするやり方と、タイ・ヌー(Tai-Nu)、タイ・タウ(Tai-Tau)のような関係論的基準が存在していると指摘している。ふたつの呼称は、それぞれ河の上流と下流のタイを意味し、その河とはサルウィン（中国側では怒江と呼ぶ）をさす。そしてそれらの基準の背後には、中国世界とビルマ世界の政治的文化的境界とその生成の力学が連動しているのではないかと推測している[長谷川 1996:84-86]。ビルマ世界にも全く同じ基準の存在が認められ、同様な推測も可能だと思われる。タイ・ヌー、タイ・タウという区分は現在でも伝聞できるし、シャン・タヨットという他称には、明らかに政治的境界が関与している。

ところがシャン州とは対照的に、カチン州のシャン系民族の下位区分にはある統一性が認められる。同州に居住するといわれるシャンの主要な人々は次の5民族である。

タイ・ロウン(Tai-Long)	人口 116,197
タイ・レー(Tai-Lei)	3,527
タイ・リエン(Tai-Lien)	138,176
タイ・カムティ(Tai-Hkamti)	3,679
タイ・サー(Tai-Hsa)	996

(カチン州博物館の掲示より)

タイ・サーは1983年センサスのマインダーと同一である。タイ・リエンつまりビルマ側がシャン・ニー(Shan-Ni)と呼ぶ人々とシャン・ジー(Shan-Gyi)と呼ぶ人々が抜きん出て多数派であることは歴然としている。担当官によると、人口は1973年のセンサスによるものだという。注目すべきは、カチン州で同州在住のシャン系民族について尋ねた場合、少数民族名への言及はあるものの、主要民族としてはこの5民族以外の名称が全くといっていい程聞かれないということである。相手がシャン系非シャン系を問わずである。カチン州のシャンの人々については、筆者の知る限り、共通する相互認識が民族間に存在するように思われるのである。

その共通認識成立の背景について、ビルマ世界におけるシャン系民族の分布と、広くタイ語系の人々の移動の歴史を念頭におきながら考えてみよう。先述のようにビルマ世界における

シャン系の人々の登場は、シュエリー河周辺のモー・シャンが最初だと推測されている。もしそうだとすると、シュエリー河から北上すると現カチン州に入る。南下すると現シャン州へ、南西の方向へ進むと、マンダレー、アマラプラ、インワ、パガンなどのかつてのビルマ王朝の中心へつながる。そのまま西へ進むと、現サガイン管区へ、さらにタイ語系の最西端アッサムへとつながっていくのである。伝説上では、モー・シャンはモーガウンと系譜的につながっている。その他のモーニン、モーメイも同様に結びつくヴァージョンもある。しかし、対照的に南部シャン州のソーボワの出自は、北部シャン州特にモーメイにあると『上ビルマ及びシャン諸州地誌』に紹介されるに留まっているのである [Scott and Hardiman 1900:203, 280-281]。

現カチン州におけるコンバウン末期のシャン・ソーボワの不在という歴史的事実と、上記のモーガウンをビルマ世界におけるシャンの王国の中心と考える伝説的真相との間に、ビルマ化が早くから進行したと思われる文化的背景が介在しているように思われる。またその介在が定番化したカチン州のシャンの分類と通底するのではないだろうか。その推測を補強するキー・タームがシャン・バマーなのである。

英領植民地時代のセンサスにシャン・バマーの名前が登場するのは、1921年からだといわれている。ところがその数は、ミッチーナールと隣のカータ県（現サガイン管区）を併せて、1921年から1931年の10年の間に6人から23,293人に増えている。誰もが想像するように、またセンサスの報告者も解説しているように、1921年のセンサスではシャンと答えた人々が、その10年後のセンサスでは、シャン・バマーとしたと思われる [CI 1933:189]。ここで強調したいのは、このことではない。むしろ1931年のセンサスにある母語と補助言語に関する言語別統計である。それによると、シャン語系(統計ではタイ語系群となっている)を母語とする人々うちの、バモー県では32%、ミッチーナール県で62%、カータ県で82%そして上チンドウィン県で76%がビルマ語系を補助言語としているのである。全く対照的に同様な人々は、北部シャン州で7.2%、南部シャン州で3.8%にすぎない。逆にビルマ語系を母語として補助的にシャン語系を操る人々は、バモー県で19%、ミッチーナール県、カータ県、上チンドウィン県では、該当数の言及がない [ibid.:196, 238-239]。それ程少ないことになる。

1931年センサスでシャン系民族群（統計ではタイ系民族となっている）の数値が3%以上なのは、上述の他に、カレンニー（現カヤー州）地区で19%、サルウィン県で8%、アムハスト（現チャウカミー付近）県で3.3%、メルギー（現ベイ周辺）県で6%、タウンゲー県で3.9%の各行政区である [ibid.:242-243]。このデータで興味深いことは、カレンニー、サルウィン、アムハストと、それぞれシャン諸州からサルウィン河に沿って南下する毎に数値が小さくなっていくことである。もっともアムハストさらにメルギーはタイ王国と近く、同じタイ語系としても別の系統の要素を考慮しなければならないだろう。

これらのデータは、時代的に考えてビルマ世界の全部の人々を網羅しているとはいいがたい。

だが、シャン系の勢力が強いサガイン管区の一部及びカチン州というビルマ世界においては、活用言語に関してビルマ語がかなり有用であることは確実である。つまりシャンに出自のある人々の一部がシャン・バマーと呼ばれうるような文化的環境が、カチン州に植民地時代には成立していたことは認めてよいのではないだろうか。

カチン州におけるシャン系の人々の「民族」分類の定式化の事実は、彼らの自「民族」観がいつの時代からかは不明だが、ある時期に共通理解に達していたことを示している。その共通理解がどのような政治的環境を背景にしているかについては、少なくともシャン人相互の「民族」間関係の安定化が推測でき、それを可能にしたのは優勢なビルマ化の浸透であったと思われるのである。5民族は、タインインダーとしてそのままシャン群の中に登録されている。ビルマ側の「民族」観とシャン側の「民族」観が共通していることを示すこのことは、広い意味でのビルマ化のひとつの現象といえるかもしれない。

シャンの「民族」観——シャンとは誰？ その構想

1990年代半ばより、ミャンマー政府は地方の各タインインダーにそれぞれの文学文化伝統保存委員会の設立を公的に認め始めた。同種の組織はマ・サ・ラ期にも存在したが、設立廃止を繰り返していたのである。シャン州のシャン人も各地でシャン語教育などの活動を始めている。シャン化のひとつの現象としてとらえうるものである。ここではシャンの側の「民族」観の資料を、シャン化の視点で参照しながら、ビルマ側の「民族」観と対照したい。そして「シャンとは誰？」について構想を練ることにしたい。

「シャンにはどんなルーミョウがいるのか？」という問いをシャン系の人々に繰り返し尋ねたことがある。シャンの「民族」観を知るためである。予想されたことではあるが、シャン系全体を俯瞰できる人は、自分たち以外の人々あるいはそれに関する知識と接点があるシャン人古老に限られた。その知識によると、シャンは30ルーミョウ（民族）だという。ところがその中には、ビルマこそ入らないものの、カチン、カイン、チンなどの山地系民族やダヌさらにはタヨツつまり中国系も含まれていた。筆者の知る限り、文献では1960年代後半に編集されたシャン語の雑誌に、「タイ系名30」というエッセイがあり、その中に、タイ・パオ(Tai-Pao)、タイ・ヤン(Tai-Yang)、タイ・リス(Tai-Lisu)、タイ・ラワ(Tai-Lawa)などの名称が含まれている [SPYS 1966:46]。あたかもシャンあるいはタイということばが人々あるいは「民族」という意味を与えられているかのようなのである。そのことを補強する記述もある [Renard 1997:175]。タイ・ヤンのヤンはカインである。ラワはモン・クメール系の言語を話す人々である。

ウー・サインアウンタウンにビルマ語のルーミョウにあたるシャン語は何かと問うた時に、

タイ(Tai)だと答えられた記憶がある。あるいはスー・クン(Su-Hkun)ではないかという。1931年のセンサスによると、シャン人は彼らから見ての山地民族を、丁寧な場合タイ・ロイ(Tai-Loi)あるいはクン・ロイ(Hkun-Loi)と呼ぶ。意味は「山のシャン」である [CI 1933: 245]。クンがタイと互換的である。135民族の中にタイ・ルエという民族が含まれているが、このルエはロイと同語源で「山のタイ」という意味になる。

別の報告で、シャン州でのシャン系の人々による民族起源神話を紹介したことがある。7人兄弟が各シャン系民族の祖先であるというモチーフだが、そこで展開される兄弟関係は、「大きなシャン」つまりシャン・ジーを長子とし「末のあるいはもっとも若い、小さいシャン」を末子とするものであった [高谷 1996:24-25]。後者はヨーダヤつまりアユタヤ王国の祖先と考えられる人々を対象としている。これらの伝聞や文献は十分なものではないが、シャンの側に、近代的な言語学や民族学の基準ではなく、生活空間の垂直差あるいは交渉関係などを背景にした立体的あるいは相対的な類別基準が存在してきたように思われる。換言すれば、ビルマ世界においてシャンと呼ばれてきた人々は、周辺の諸民族との交渉の中で、自民族を基準としながら、周辺民族をとり込んだ形でのシャン化の傾斜をもつ「民族」観を培ってきたのではないだろうか。上述のタイやクンの用例、あるいはリーチの記述にある「カチンがシャンになる」という言説 [Leach 1954] は、そのことの一つの様相であるように思われるのである。

比較対照のために、ビルマ側の「民族」観におけるシャンを類別してみよう。その方法には、共通する部分もあるが、シャンのそれと異なる構造も認められる。

ビルマ語のシャン系民族に対する呼称の中で、3つだけが常にシャンということばが後に付く。カムティ・シャン、モー(マオ)・シャンそしてゴウン・シャンである。居住地域もそして集団としてのまとまりもビルマ人にもシャン自身にも認められている人々である。ゴウン・シャンはサルウィン河の東方チャイントウン周辺に居住している。一方シャンが前に付く名称では、シャン・ニー、シャン・タヨッは、政府のタインインダーの民族名ではない。但しいずれも頻繁に聞かれる呼称であり、ビルマ側から見て、ビルマ化そして中国化の影響を認めることができる人々をそう呼んでいる。その他の名称は、シャン・ジー(大きなシャン)あるいはシャン・カレー(小さなシャン)などの相対的名称、あるいはムオン名を付加する名称となっている。最後のカテゴリーはシャン側の類別基準がそのまま導入されているようである。このようにビルマ側の「民族」観には、明瞭な類別方法が認められる。だが対照的にシャン側の「民族」観では、言語的に非タイ系の人々をも含む名称は、すべてがタイ(Tai)プラス特徴的で説明的な接尾辞で横並びになっている。つまりシャン系と非シャン系との境界が不明瞭なのである。

「シャンとは誰?」というテーマに構想を描く際に、2つの河川が重要と思われる。1つはイラワジそして特にその支流のシュエリー、チンドウイン、ミッゲ河川。もう1つはサルウィン河である。モー・シャン、カムティ・シャンさらにシャン・ニーの諸集団は、イラワジ本支

流でつながっている。北部シャン州も、マンダレーの南で分岐するミッゲ河でつながっているのである。そしてこれらの河川流域はモー・シャンを発祥とする伝説でもつながっているところがある。ところが対照的に先述した通り、南部シャン州はモー・シャンとの系譜関係は余り明瞭ではない。逆に地理的に注目すべきなのは、サルウィン河流域である。1931年センサスからも、少数であるがこの河川流域にシャン系の人々が居住していることがうかがわれる。タイ王国内でシャン人（タイ王国ではタイ・ヤイあるいはニョウと呼ばれる）がもっとも多数居住しているメーホンソーン県も、サルウィン川河水系に位置する。この2つの河川流域に位置するいわゆるシャン高原が、かつてのシャン・ソーボワの中心地域なのである。上述してきたシャン系内部の相対的基準や、ムオンを出自として自己を参照するやり方が多様なのは、この地域なのである。サルウィン河東側のゴウン・シャンは、歴史的に中国雲南省西双版纳、北部タイと関係が深い。西側の地域が歩んだ文化変容とはその背景が異なる。このサルウィン河の西側の地域は、歴史的にカンボーザと呼ばれてきた。ビルマ世界におけるシャン化はこのカンボーザを中心に進行してきたと思われる。周辺民族を取り込む形である。そしてそのシャン化はカチン州程ビルマ化の影響を受けなかったのではないだろうか。

カンボーザにビルマ化の影響が本格的になるのは、独立後あるいはソーボワの退位を経ての革命評議会時代開始前後からと考えた方が歴史的には妥当かもしれない。そして、現在(1997年)に至るまで、軍事政権下、ビルマ人を最大民族とするビルマ化の強い傾斜の中にシャン州が存在する。シャン化もまたビルマ化の脈絡の中で展開していると考えられる。他方、1990年代に入ってからミャンマー政府の経済開放政策への転換で、隣のタイ王国と中国との結びつきは、人の移動という点でより太くなってきている。特にシャン州から出稼ぎなどさまざまな理由で北部タイへ流出するシャン人は、具体的な数字は不明だが、かなりの数にのぼると推測される。シャン化の動向とシャン州の文化変化は、今後、国内及び国境を越える両面で追跡する必要があるようである。ビルマ化とシャン化の通時的追跡は、未開拓な部分が多い。本論はその構想を示したにすぎない。

イラワジ、サルウィン両河川が歴史的に文化的動脈であったことは確かである。ビルマ世界におけるシャン文化は、ビルマ文化の影響を受けつつ、その間隙において形成されてきたと思われる。シャンとはまさにシャン高原に移住し、そして適応してきた人々なのである。シャン・シッシツという自己意識を培ってきたのは、シャン高原におけるシャン・ジー(大きなシャン)という世界解釈だったのではないだろうか。2つの河川はその境界ともなっているのである。その境界の北西側は、かつての9つのくにの「伝説的」中心であり、東側は北部タイに文化的に連なるゴウン・シャンそして西双版纳の土地である。歴史と伝説の間、ビルマ化とシャン化の具体的過程と相互関係、そしてこの2つの河川流域を軸とした本格的な民族史学的研究は端緒についたばかりなのである。

付 記

本論で参照した文献のほとんどは、1996年11月より1997年8月まで文部省在外研究員としてミャンマーの大学歴史研究センターでの滞在中に収集したものである。受け入れて下さった同センター長及び同国政府、滞在申請の仲介をしていただいた日本国外務省及び在ミャンマー日本大使館に感謝の意を表したい。また不在中の職務を代行して下さった所属機関の諸先生方事務の方々にも併せて感謝したい。

なお、本論ではいくつかの具体的な資料や解説を参照のみで未提示のままである。その補充は将来改めて行うつもりである。また本論での民族名、地名などは、発音に近いと思われるものを基準にしたが、一部慣例的表記に従ったものもあることを断っておく。

参 考 文 献

- エー・チャン(Aye Chan). 1987. 「中世ビルマ史における地方経済圏と民族関係」京都大学学位論文。
The Burma Gazette (BG), part 1, 13 July 1895. Rangoon: Authority.
- Burma Socialist Lanzin Party (BSLP), ed. 1968. *Taingtha Yinkyeihmu Hnin Yoya Dalei Htonsan Mya, Shan*. Yangon: Central Office of Burma Socialist Lanzin Party. (in Burmese)
- Census of India (CI) 1931*, Vol.XI Burma Pt. 1. 1933. Rangoon: Office of the Supdt., Government Printing and Stationery, Burma.
- Chit Maung, U., ed. 1987. *Ahtu Ubadei Mya (2), Myanmar Naingantha Ubadei*. Yangon: Aung Kyaw Hpyu Press. (in Burmese)
- チット・プーミサク. 1992. 『タイ族の歴史——民族名の起源から』坂本比奈子(訳). 東京: 勁草書房. (原著 Cit Phumisak. *Khwam Pen Khong Kham Sayam Thai Lao Le Khom Le Laksana Thang Sangkhom Chu Chonchat*).
- Elias, N. 1876. *Introductory Sketch of the History of the Shans in Upper Burma and Western Yunnan*. Calcutta: The Foreign Department Press.
- 長谷川 清. 1996. 「上座仏教圏における『地域』と『民族』の位相——雲南省、徳宏タイ族の事例から」『東南アジア大陸部における民族間関係と「地域」の生成』(「総合的地域研究」成果報告書 No. 26) 林行夫(編)所収. 京都: 文部省科学研究費補助金重点領域研究「総合的地域研究」総括班.
- Hko Hseng. 1996. *Pun Hkun Tai lei Pun Mong Tai*. (in Shan)
- Hmannan Maha Yazawin Daw Gyi* (HMYD), Vol. 1. 1993. Yangon: Kyeimon & Guardian Press. (in Burmese)
- Kachin State 1983 Population Census* (KSPC). 1987. Rangoon: Ministry of Home and Religious Affairs.
- Leach, E. R. 1954. *Political Systems of Highland of Burma: A Study of Kachin Social Structure*. London: G. Bell and Sons, Ltd.
- Mi Mi Lwin. 1992. Koloni Hkit Shanpyi Outchotyei Thamaing (1923-1937). M. A. Thesis, University of Yangon. (in Burmese)
- Min Naing, U. 1971. *Taingtha Yinkheihmu Nidan*. Rangoon: Ministry of Culture. (in Burmese)
- Pu Loi Hom; and Pu Loi Tun. 1997. The Foundation of Mong Kawng. In *Shwe Yadu Shan Pyine Magazin*. Yangon: Taunggyi Athin.
- Renard, Ronald. 1997. For the Fair Name of Myanmar: They Are Being Blotted out of Burma's History. In *Burma/Myanmar in the Twenty-First Century: Dynamics of Continuity and Change*, edited by J. J. Brandon. Bangkok: TK Printing (Open Society Institute).
- San Shwe. 1992. Konbaung Hkit Hnaung Shan Myanmar Hsethsanyei (1819-1885). M. A. Thesis, University of Yangon. (in Burmese)
- Sao Keng Tung. 1954. *Hkun Tai-Mong Tai*. (in Shan)
- Scott, J. G.; and J. P. Hardiman, ed. 1900. *Gazetteer of Upper Burma and Shan States*, Vol. 1, No. 1. Rangoon: The Superintendent, Government Printing, Burma.
- Shan Pyine Yinkyeihmu Sazaun* (SPYS). 1966. Taunggyi. (in Burmese and Shan)
- 高谷紀夫. 1995. 「ビルマ精霊伝説考——コーミョウシン(Ko Myo Shin)の伝承から」『Monumenta Serindica No. 26, 南アジア, 東南アジアにおける宗教, 儀礼, 社会——「正統」, ダルマの波及・形成と変容』石井溥(編). 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- _____. 1996. 『『シャーン』世界とその脈絡』『東南アジア大陸部における民族間関係と「地域」の生成』(「総

合的地域研究」成果報告書 No. 26) 林行夫(編)所収. 京都: 文部省科学研究費補助金重点領域研究「総合的地域研究」総括班.

Toe Hla. 1981. Hnit 200 kyaw ga Lashio Myo Hnin Hnit 80 Pyi Lashio. In *Shan Pyine Deitha Koleit Lashio 1980-81 Magazin*. Lashio: Lashio College. (in Burmese)